

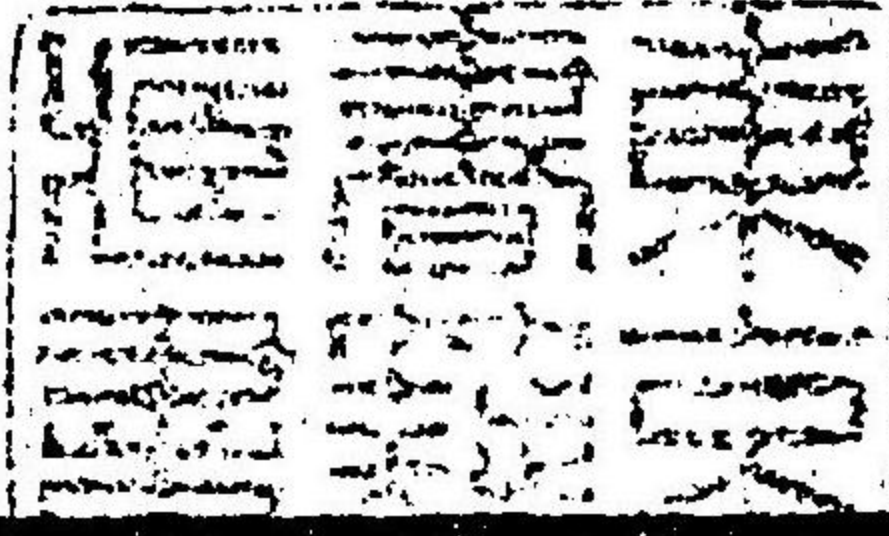
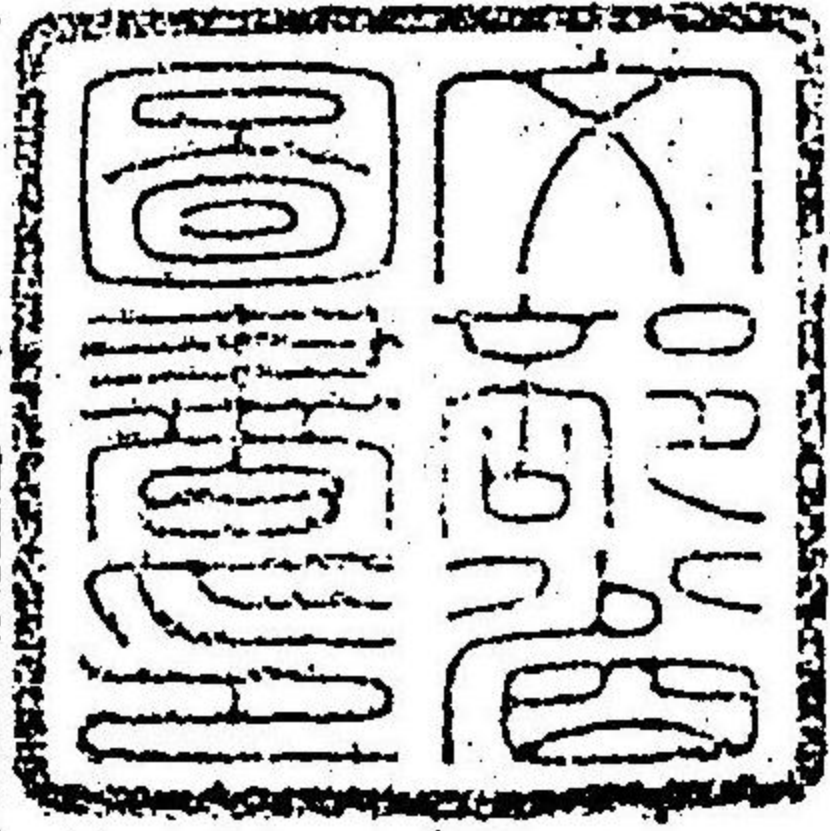
西洋易知錄

六

特31
室
一
六册
號
架
圖

674

共  
九  
本



西洋易知録卷之四下

第四篇

「チユートリック」會社の士プロシヤ普魯士と攻め取り事

團紀元千三百零九年會社の士マリ

ーシビュルグを都とある

トニックとワム會社第三の十字戦中より起しこと

を既の上より説き

波羅的海の東南普魯士の地は濕地森林多うりく項

其地はボルニツシムとして頗る勇猛ある人種スラフ種のニツ

住ひたり其民を皮又麻と衣服とふし馬の肉と食ひ馬

西洋易知録 卷之四下 第四篇 下

の乳汁と飲ミ日月星を禮拜を貴ヌの死シて其屍を焼  
 くや其妻妾奴婢兵器赤馬に至リて屍と共に之を焼  
 焼々其民の用テ所の兵器を長短槍の多クあねども能  
 く西教の諸國に敵をなす事能はず耶蘇の教門其民は及  
 ぶことありたり波蘭の民之と打從へんと欲シて數  
 軍と起シて之を攻メんと殆んど四百年の久しき  
 及ひたりども之を勝つこと能はざりしとぞ

第五の十字戰終リし頃波蘭の一諸族チエートリック會社  
 の士を招きキルム城波蘭ウイスチラ河邊の一城ありと借し與へボ  
 ルツシ人と討つことと頼とたり  
 チエートリック會社の士キルム城を屯シて軍と名じり後

又トルコとワム城を築テ時ニ千二百三十二年此を移リ益ボル  
 ツシ人と合戦シタラ遂ニ之を平定シタリ此合戦  
 を紀元千二百二十八年に始まり千二百八十一年に終  
 了其間凡て五十三年の長戦ニシテ普魯士の地平定を  
 此軍の始まりし頃リホニヤの義士カ剣義士チエートリ  
 ック會社ニ加をきり

普魯士平定より三十年の後社長都をバニーストマ  
 リーンブルグに徙シタリ  
 會社の士普魯士を平定スルヤボルツシ人の酋長幾個  
 と擧て士とあせしグ平民を盡く奴僕とふしぬ此とま  
 又諸所ニ城を築きて寇を備へ且つ戰爭中ニ社中の入

數多討死し、人々の缺と補ふが為、日耳曼の士を招き、日耳曼の語、國中に弘まり、懶惰と厭ふ風俗、日耳曼人の氣質、國民に推し、遷り、牧畜耕作の業、日盛んあり、交易を波羅的海の邊、ウイスマラ河の兩岸に繁昌し、海中より獲る所の魚を、恰も山と為し、海濱に採る所の琥珀を、殆んど丘のごとし、國中之世が為、巨萬の富と為し、

會社の領せし地、北を波羅的海、ウイスマラ河の西よりヒンランド灣の南岸に至り、南ハトルンに至り、其地を今の東普魯士の全地、西普魯士の一部、并魯西亞の三郡、コイルランド、リホと兼稱し、タゴゴトラ

ンドの二島も亦其會社に屬せし、國中の大都城をマリオンブルグ、コーニグスブルグ、ダンチックの三地ふ

社長を大に奢侈と極めたり、社長嘗てリキアニアと討んと欲し、ニーマン河の兩岸に士を集めて之と饗應し、多に美服し、多に奴僕を命じて金襴の天蓋を撃かて、各人の後を侍せしめ、三十種の珍物を以て之と饗し、饗終ると後各人を以て金皿金杯を持て退らしめ、其奢侈と極ること此の如し、蓋し此の如く奢侈と極めしを以て富る國も遂に疲弊するに至り、國政も亦凶暴に流れて士民を虐け、日耳曼より被るる人

こを悔りたれど國民遂に波蘭人<sup>ポーランド人</sup>と接と乞て一揆を起  
 しう頃と紀元千四百十年に波蘭の兵會社の士とク  
 ニ子ンベルグ<sup>南普魯士</sup>に於て合戦し大に之を破る  
 り時社長ユルリックを初め會社の士數多討死し賤卒  
 の死者を三萬人ありし  
 其敗北より會社の勢全く衰へしうど後五十餘年即ち  
 紀元千四百六十六年に至りて會社の士遂に盡く波蘭  
 に降るり

第五篇

瑞士人自立を事

紀元千三百十五年モルガルテン

合戦し 千三百八十六年

又合戦し

耶蘇紀元の始つてヘルヘチヤ<sup>瑞士の古名</sup>とガリック  
 種族の民多く其地を羅馬國に屬しり諸夷の侵入し  
 たりときボルゴニヂー國に合し後又此國と共に查理  
 曼に屬を查理曼殂落して後日耳曼帝の屬地とありへ  
 ルヘチヤの地を其内諸州に分裂し皆帝に屬をとりし  
 ども各自ら其政府あり諸州の中にも最も著しりし  
 をリュヘルン湖南の三州スウィツ、ユリ、オンデルワルデ  
 ンはまあり

紀元千二百七十三年瑞士國ハパスビュルグ侯ロドルフ

撰りて日耳曼帝とあり是は墳土利國帝族の祖あり  
 とぞ初めロドルフを瑞士スイスとありて數多の城邑を領し  
 瑞士諸州の守護と為しつるが帝位を登りて至りても  
 瑞士人を見棄るが數此國を歸りて民の勞苦を慰さめ  
 數多の免許を與へるを瑞士人を甚たく悦び心と傾  
 けて日耳曼帝は仕へ恰うも小兒の父母と慕ふが如く  
 ありし

然るに紀元千二百九十八年ロドルフの子墳土利王オーストリア  
 利を父で取ルフ地ありてアルベルト帝位を即きてや  
 父の時瑞士人より與へる免許等を禁じてゲスレルバ  
 リンゼルとつふ二人の官司と遣えして此國を管轄せ

しめつるがこの官司の爲せし政甚くぞ兇暴ありしう  
 ど國民之を怨まざるいありりや

爰は瑞士の民はワルトルホルスト。アルノルドボン、メ  
 ルクタル、ウエル子ル、ストリーファセルの三人とつふ三人の豪  
 傑ありりり紀元三百七十年十一月某日の夜に於て三  
 人ルセル湖邊の或る原に同志の親友三十人を集め  
 我門を國に報して若し成らざれば必を死んと誓ひし  
 り三十人の者盡く同じ言葉を誓ひるを然らば翌年  
 元日の夜に事と起さんと皆其日と心と記してぞ散  
 しつる

其三十人の中はウイルレマテルとつふ者あり此人をア

ルトルフの近傍あるブルグレンといふ處の住民より  
 て能く弓と彎まがましが新春の到るを待るべしと官司ゲ  
 スレルと射殺ししよりそれよと奇異ある譚ワザナヒりれど我を  
 試シとんごよ説シま示さん然し當今の史家其真偽を疑  
 ふ者多しとぞ

官司ゲスレルスウイスツル瑞士人の澳土利王オーストリア即ち皇帝よ心服を  
 や否と試とんが為めよアルトルフの市場は澳土利  
 王の冠と懸け其前と通行する者を必だ腰を屈かめ  
 禮と為せと觸ふまししが一日ウィルレムテル子と携へて  
 其下と通行せしよ禮と為まごししを捕手直ツクよ之  
 と捕へてゲスレルの前よ引まへるりゲスレルテル

よ向て汝を弓よ巧者ありと関かまきけよ今汝が兎の  
 頭上よ林檎りんごを置いて之と射落さば汝が罪を免まごし  
 とつひ人よ命いのちど其兎を抗かし縛しその頭上よ林檎  
 と置おかしめいざととテルを促すすせりテルをよとくお観  
 望ぼうして彈たまと放ちるるが其矢過るる林檎と貫くまくれ  
 ど觀る者一齊いっせいよどらと喊聲こゑを擧あげりりりテルを  
 矢と受るとき別よ一條の矢を匿し持ちるるとケス  
 レル早くも之をよ見咎とがり云汝乙矢と持たばやそ  
 を何の為めぞと罵りりりぞテルを少しも臆おそせる氣  
 色いろなく静しずかに答こたへ云我若し申矢と射やりしとき  
 を汝と射て我兎の仇あだを報うせんと欲ほしむるありと

ゲスレル大に怒りテルを縛せしめ之をクスタク  
 川の獄舎に繋ぐんと欲し即ち船を湖に泛べ船中  
 テルを入きて湖を渡らんとせしが中流に到りしと  
 き大風暴雨劇うら起りこれを船を今も覆るべく  
 見へよりテルを湖中の事慣きし者ありて  
 どゲスレル其縛を解きて船を漕がしめりテル竊  
 うに悦び船を岬の處に漕ぎ寄せ岸に跳り上りて  
 林中に逃入り直に其中よりゲスレルを觀ひ之を射  
 殺しり

是に於てテルの名天下に轟きり後モルガルテンの  
 合戦もテルを武勇と顯はせり紀元千三百五十年或

河に溺きて死せり

千三百零八年の春瑞士人兵を起して澳土利人の守せ  
 る諸城を抜き去れり國中祝火を灯して勝利を賀せり  
 アルベルト帝之を閉て直ちに軍勢を集めて瑞士に進  
 發しりガレムツとの處に其甥スワビヤ公ジョン  
 之を弑して瑞士人又與せんと量りしが瑞士人弑逆の  
 賊と納りしことを耻て之を否とししがジョンを餘儀なく  
 伊太利に匿きていと果敢なく身と果ぬ今の君子瑞士  
 人の所置と稱賛は

アルベルト帝殂してより七年の後其子奥土利王レオ  
 ポルドスウィッツ瑞士州名を征伐せんと欲し一萬五千騎を



率ひてジグと出立を此地よりスウィツツに至るにサ  
 テル山とイグリ湖との際長三里の陝路を過さるるを  
 得て此路をモルガルトンの路と云ふ紀元千三百十五  
 年十一月十六日の内辰朝霧をく照る日の影いと赤  
 き澳土利の兵山際の路を進り鋼鍔を以て身を固  
 める騎士を前陣に備へ歩卒を盡く之に随ふ瑞士人  
 之を関き神を祈りて擁護を乞ひ互ひに諫め励まし  
 其勢凡千四百人ほど路の側を埋伏して合やおとしと  
 敵の到るを待ち居りこゝに又嘗てスウィツツより追  
 放せしむる勇士五十人あり今度本國の為め功を  
 立ち歸参せんと欲しければ亦路傍の險阻を登りて

待ちつらうしが敵兵の到るを見て直ち大石大木  
 と其上を落し多くを澳土利の兵を大に亂れ立し  
 處を千四百人の勢得るりと槍又を棒を舞して山際よ  
 り跳で出で霧を糸づく敵兵を斬立てりれば敵の騎士  
 或を馬と共に湖中へ轉び落ち或を周章て歩卒を蹂躪  
 せり嗚呼嘆をぐし此日澳土利の敗北せりや鋼鍔の甲  
 冑銳き長槍を以て寡き不練の兵を敵し棒又短槍の鈍  
 きを打負け多るあねを澳土利の人を必を皆口惜しく  
 思ひつらん。王レオポルドもまゝ危うししが馬の疾ま  
 と以て卒づく死を免せ山又山を越てウイントルチルよ  
 馳せしがこの地を到着せし時を日已に没せし頃あり

瑞<sup>スウェーデン</sup>士諸州のうら<sup>スウイッツ</sup>スウイッツの人此合戦は功最も多し又  
 此後の大戦争はも功なりし今瑞<sup>スウェーデン</sup>士國と名づくるを蓋  
 し此國諸州は冠多りしゆへあり<sup>瑞<sup>スウェーデン</sup>士國もとハル</sup>チヤと名づく  
 瑞<sup>スウェーデン</sup>士の三州駐ぬを互ひは相助らんこと成盟ひらるが  
 紀元千三百三十五年よりセルンその同盟は加より千  
 三百五十一年よりジュルチジグ又之をより加よりグラリス  
 ベルンも亦同盟は加よりしむる<sup>瑞<sup>スウェーデン</sup>士八州の同盟始</sup>りて成りたり  
 紀元千三百五十三年<sup>スウェーデン</sup>瑞<sup>スウェーデン</sup>士又埃士利國  
 とセルンは會は此時瑞<sup>スウェーデン</sup>士を勝利せし以來全く自立  
 の國より内後聊も澳士利の方より決して異

論をたことありとんと條約遂は決しあり<sup>瑞</sup>士  
 士の國人を弥職業と勉勵して聊も奢侈をあること  
 ありしを其國益繁昌しり  
 スワビヤ公レオポルド<sup>此人も亦埃士利ハバ</sup>瑞<sup>スウェーデン</sup>士を攻  
 め平がんとバードンと出立してセルンへと兵を進  
 るるに其兵センバクに到りしと<sup>瑞<sup>スウェーデン</sup>士の兵千三</sup>百人程險阻は據りて之を支へり時<sup>は</sup>澳士利の兵  
 と騎兵四千歩兵千四百人あり<sup>レオポルド</sup>公諸將を  
 會して戦ふべきや否と議せし<sup>し</sup>諸將皆答て敵ハ  
 農民の寄り集りし烏合の勢あり我等之を一擧は打  
 破すべきを論を待るべしと明らるるや決して後陣

の来ると待つよと及をじと言ひたれど然らざ直に戦ふべしと命せし頃を紀元千三百八十六年七月九日澳土利の兵馬を山戦に便ふるに皆馬を棄て齊く堂として陣を布く甲冑を烈日に照らすに煌々と光を放ち其有様勇まふんども愚らあり瑞士の人を兼て期しあることあれど之をを見て恐るゝ氣色なく谷天を拜して勝利を祈り皆一齊に攻め懸きり澳土利の兵も固より悍ま精兵あれを其兵と戦ふこと僅かの間六十人を斬り倒しあり時は澳土利の兵両翼を進めて其兵を取圍んとせしが瑞士の勇士アルノルド・ホン・ウインケルリード一人真先は跳り出で

當るを幸ひ勇を奮て斬り倒しなれど澳土利の兵争ひ進てアルノルドを取り圍み遂に之を突き殺しあり瑞士の兵此間を棄てて驟雨の如く敵陣に突入し散るに斬立てくれど澳土利の兵を大に敗北し討死する者立地は二千人に及ぶ此時レオホルド公も亦潔く討死しあり

是より二年の後澳土利の兵又瑞士人と子ヘルスに戦て澳土利の兵又敗北しあり  
 紀元千三百九十三年瑞士の諸州は又會合して盟と尋ね左の箇條を約束しあり  
 瑞士の人を無益の戦争と起さばべし若し戦争と

為さふことと得ざることを國中一致して敢て私  
 不の字をいふべし戰場の内を傷くとも走  
 るべし大將の許さざるときを敵地といへども  
 亂妨をばべし寺院を壞つことありれ婦女を殺さ  
 ことあはれ

是は於て瑞士を澳土利の管轄を脱して長く自立國と  
 ふまり拿破侖の起りや此國も亦彼より籠絡せしむ  
 しといへども其滅多や又直に自立して一強國となす  
 是はモルガルテンセンバツクの兩戦に勝利せしゆ  
 あり

ハプスブルグ、リュクセンブルグ、バハリヤ三家  
 日月曼帝即位の表

帝王の名	紀元
ロドルフ <small>「ハプス」 「ブルグ」 侯</small>	千二百七十三年
帝を立ざすの間	千二百九十一年
アドルヒウス <small>「ナッ」 「ウ」 侯</small>	千二百九十二年
アルベルト <small>「換」 「出」 利王</small>	千二百九十八年
リュクセンブルグの顯理第七	千三百零八年
帝を立ざすの間	千三百十三年
バハリヤの路易第四	千三百

澳土利のフレデリック第三	為政	十四年
路易十四		千三百三十年
リユクセンビユルグの查理第四		千三百四十七年
ウエンセスラス	ボヘミヤ王	千三百七十八年
フレデリック	ホルンスタイン王	千四百年
ルエパルト	聖尼	全
ジョシユス	モラビヤ侯	千四百十年
レギスモン	神王	全

第六篇

任侠の風俗を述ぶ

中古

泰西の人々羅馬滅亡の前後太古と名つけ其滅亡のころコロンビウス亞墨利加を發明するに至る

古と称す中々當りて「シハルリ」任侠と云とりのこと  
 と一般に行なれり「シハルリ」とを何ぞ中古の士  
 武藝を好む太平をを園囿をわたりて武勇を競ひ戦争  
 ありるときを戰場をわたりて功を争へり是を「シハルリ」  
 の事とりのあり  
 「シハルリ」の原始を尋むる一朝一夕に起しし事  
 あり「シハルリ」の羅馬の誰撤盛んありし頃日身曼の國入既  
 其風あり故にタシキエス氏羅馬の云く此國をわたりて  
 を貴族の子弟といふども皆名高き大将の旗下に事へ  
 て勇士と稱せり其ことと面目とせりと羅馬滅び  
 歐羅巴大に亂せし中々勇を好む風を廢ることなく

漸く盛んとなり查理曼の時その風頗る尚すこと  
 久しかりぬきねど「シハルリ」の事十分は諸國の風  
 俗とありしと十字戦の最中ありたり  
 社とありて馬に乗ることと許さるる中を二等  
 の賤官と經さるるを得む先づ侍童とあり次は龜從と  
 あり然して後又社とありことと得るとぞ今其委し  
 きを左に説かん  
 社とありんと欲する子を七八歳の時は武勇の聞へ  
 ける或貴人の城中に遣はして奉公せしむ是を侍  
 童とりつあり侍童は主公の事へ之をが為めは手書  
 の使とふし主公の遊歩せしむ又を遊獵ふとて出馬

せしむるときも之を從て専ら丁寧信切に勤めざ  
 るを得む其褒賞として侍童はを武藝と學ばしめ音  
 樂象棋と教え傍ら經文をも教えたり  
 侍童十三四歳の頃龜從とあり此時父母之を誘  
 ひて寺院に詣で神と拜せしむ寺院の僧之をが為め  
 は後來の幸福と祈り劍と帶と授く是を禮あり查理  
 曼の祖しるる後をて此禮ありしが此禮の行ハ  
 れしより「シハルリ」のことと更に盛んとなりあり  
 とぞ中古に當て入性凶暴ありしが「シハルリ」の盛  
 んありや人々心は義氣を生ぜしめしうぞ風俗こん  
 が為めは頗る改まり故に「シハルリ」を中古一教

化の道と稱えとも可ありとん

侍童と女子と給事を扈從とあるに至りてと然らば

男子と給事をふり扈從と各々の任ざる所の職務

たり大家の扈從多或を常日主公の侍をる者りり

或を食事のとき抹布と齎し又肉を割

く者りり或を乗馬と秣飼ふ者りり或を倉廩の鑰と

預る者りりりり食事終るとき扈從を坐敷に踏歌の

丈度とふし踏歌の絶間毎に諸人よ菓子と配り酒を

勧むることと任ざる音楽とふして諸人と慰めけ

と

扈從の任右よりへるが如きものとありて田獵と為

し武藝を學て武道に達しふる扈從を主公に隨ひ其

兵馬と牽て戦場に行き或は競武會に趣きりり戦の

始まるとき主公を平服を着て別馬に乗り甲冑

を兵馬の鞍上よ懸け置らしむ戦の時刺至まを扈從

其甲冑を取ると主公に著せしむ甲冑を着る術も

習はざれを能はざることありとぞりて主公の戦ふ

間暫時も扈從を其後と離まば主公の槍折るれど之

は別の槍を與へ主公の馬傷まししとまを別の馬を牽

き来て之は與へ主公急ふれど其助力をある或を又

主公傷まししとたを安全ある地に誘て之を介抱せり

是を扈從の任りて二十一歳に至るとき之を為

さかふこと以得ん

扈從こじゆより士とあるときと教多の禮式らいしきなり其日と大  
拔ひキリストマス「エーストール」ボワイトソインタイドボワイトソインタイド  
名なの日を用ひり士とある者其前日を断食だんじきして  
過去の罪を懺悔ざんげし一瞬も眠らば經と念ねんしてその夜  
と明しゆく沐浴みよくして衣服と改むその日著る所ところの  
服と一領の相服さうふく一領の金縁絹服きんえんきぬふく又またを麻一條の革帶くわたい  
よして其上よハ甲冑かぐを着せりさて其士を此服と著  
して寺院じやういんに詣で僧そうに劍と授け又一篇の經文と念ねんを  
此時士ハ孤寡僧侶と援け西教門の敵と戦ふことと誓  
ひ又經文と念ねんを其事終しゆうとしときは是きまで主公あり

し人こゝろ童わらわ扈從こじゆの二官にくわんを故ゆゑに僧そうより侍士じやうしに内うちひて士多  
者の為ためを乞こまき事を云いふあり必かならず之を守りや否いなを  
問とひ士をして之を守らんことを誓ちかはしめ其入いりの僧  
に渡せし劍を返し與たまへ一あが僧そうの手ては觸ふるときと  
ぞ且かつつ士をして白革しろくわの袴はかまと懸かけ金の制具せいぐを馬うまに進  
の車くるまと着きけしむ此こゝろとき主公劍けんを授たまへ其頭かぶを刀背とうはい擊うち  
つん是こゝろは扈從こじゆと士とあるの禮らいあり刀背とうはい擊うちを為なさば  
しと身みと平手ひらて擊うちするの禮らいも有り  
社の着きしころ甲冑かぐの時ときに數かず變革へんかくなり昔むかしし羅馬ローマの騎  
兵へいを革くわと鏡かがみの板いたと縫ぬいひ着きけるも鎧よろいと著きしありし  
ど俄とつに亞蘭アララ其餘こゝろ歐羅巴ヨーロッパの諸夷しよゐも羅馬人ローマじんに倣なひ合あし



容ある鎧を作りてこれを着しありしが十字戦の時  
 より歐羅巴の人此の如き鎧を廢して亞刺伯人の用  
 る鎧甲と着きり鎧甲を手足を動さし便よりねを  
 あり頭より鎖頭巾と戴きその上より又鋼鍔の帽子を  
 冠り手より臂罩を懸け足を鋼製の沓と穿りその  
 有様奇くとして聊かも趣きふし僅くは楯の紋を聲  
 花よりて又目と悦ぶは足も尤も黄粘皮の縁付き  
 るる外套と鎧甲の上より着せし者もけりけりゴトフ  
 レー等の耶路撒冷よりわたり戦ひし頃の戎服を此の  
 如くしてぞけりける  
 昔し馬より鎧を着せることありしが十字戦の時

馬を射らむて之をば為め討死せし者少ありしが  
 又しりぞ其後と馬より鎧を着せることなかりぬ紀  
 元第十四紀より至りて鎧甲又廢せ皆鋼鍔の板を重ね  
 て作りある鎧を用ひたり此鎧と鎧甲よりよく矢も  
 當るべきと以てあり  
 鎧甲の廢せし鋼甲の行ひたりや士の装の美ありし  
 こと驚くべし身より金を撒き散しあり鋼甲を着し  
 頭より羽毛を飾る堯と戴り其携ふる所の兵器  
 を槍劍斧鉞七首ありしとぞ  
 装の此の如く美し流し後戦場よりわたり功を立る  
 の士古より却て少し其故如何よとあるを又く敵の

矢を恐むて甲冑を厚くしるるはへり多し馬も亦  
鎧を着せしるるなりを實に敵の矢こそ防ぐなりなど  
も自ら働くは便りありしがれど勇者も功を立てる  
多かりしを必定あり故に此時に至りて「シハルリ」  
のこと衰へたり

太平のとき士を競武會を催して樂しめり競武會を  
佛郎西フランドルの地ありて始まりしころよりつと速くは英吉  
利イギリス日耳曼ドイツより推し遷り多し戲まふり戦の場所を周  
圍に繩を張り又を杭を施し且つ見物人の為めは棧  
敷を設けり戦ふ兵器を尖頭ポイントの木丸を著けるる槍  
を用ひ相手と馬より突き落を以て勝りといふ佛

王ヘンリー第二を競武會の傷より遂に殞落せしと  
り最と危き戲まふりや故に中古の僧徒等之を  
と譏りしとぞ

「シハルリ」の旨といふ所三つあり其事をもと日耳曼ゲルマニー  
人の勇を好む所より起りしものあり初めを純  
乎なる武勇の事ありしが紀元第十一紀に至りて僧  
徒等武士と交ることと好む之を為めは士と作る  
の禮式マナー見ゆと立てしときより教法の意呆シハルリ  
の旨とあり故に士とある者も必を誓て云く  
寺院を守護し教法の旨を背らざと後又女を敬むる  
こと「シハルリ」の旨とあり此事や淫を誨へ治

と導く風を流し易しとつへども然せども婦人々  
 賤視をるを無告と虐をるに近き夷蕃鄙野の所為に  
 して開化文明の入を之と可ありとせざるあり  
 「シハルリ」の衰も亦一朝一夕のこゝろに試  
 々之を説く人紀元千三百二年佛國の士フラン  
 ドル人とコールトライ 西フラン 戦ひ敗れ取り  
 しことなり是戦より人皆甲冑を着しそを用はざ  
 ることと知まり或人サクソニ語を用て此合戦の事  
 と述て云く吟之と 直譯を文の洋格は拘 貴人達 佛人  
 ふを匹夫の勇を誇り且つ 鐵工機匠 フラン人 と  
 輕んじて前後を願ふる者多く只管先を争て馬を進

めあり豈知らんや我と敵との間は一條の深き溝に  
 らんと馳來り貴人達をわがまを之を陥れて馬  
 を墮れ共の劍を制具と共に入馬 人馬 意 陷 者 泥水  
 中を沈む其有様恰も人馬の雪崩 う 疑 れ 憐 ま  
 といふも愚かり此とま溺 を 者 幾 千 とい といふこと  
 と知らば其溝遂に人馬を以て填まりぬ時 對 岸 に  
 陣し も 商人の兵棒を舞して馳來り登らんと欲を  
 か貴人の頭を打破まかりと英國の弓隊も亦甲冑を  
 著る騎士と恐をざりしクレシーポイクトールの  
 兩戦は英兵勝利せしを弓隊の力あり 此戰争季録  
 西洋易知錄

外篇

中古の末に至り歩兵又尚すことあり始めぬ  
瑞士の歩兵と澳土利の騎士と勝り其餘諸河の戦  
争は瑞士の歩兵と功と頭と有り是も中世にシハルリ  
と衰へしむるの一事あり  
然し「シハルリ」と充分に滅せざるものも火薬の發明  
ありそれ英國の強弓瑞士の大刀とつんども之を  
當るべき甲冑と造らんと欲せど能はざること有り  
んや彈丸に至ては何物も能く之を防ぎ得ん砲銃  
の世に行はるゝや接戦少く距離遠き所より射て戦  
ふこと多し此時に當り勇りも兵法と知らざれば  
勝と制し難し且つ兵法も火薬の發明より以來大

變革して古の法を用ふるも益ふし抑火薬ハ亞刺伯  
人の歐羅巴に傳へし物ありと言ひ傳ふ既に紀元千  
二百四十九年出版の亞刺伯書に火薬と戦争に用ひ  
しこと叙述べあり歐羅巴に射て之を之と發明を  
りこと大に遅しゴスラルの僧スワルツ嘗て化學を  
學び試みて諸薬を調合せしとき思ふにも火薬を製  
し始めを火薬の原由と知りしを千二百四十九年よ  
り一百年も後せしことありまきて火薬の發明せら  
後始めて用ひるる砲銃を小なる加農砲ありし紀元  
第十六紀に長き小銃と又手懸る之を之と放り  
小銃の行はるゝに至りても始めを騎兵と防ぐる為

めよ槍と携ふる者も隊中へ備へ置ましが銃槍を發  
明せしとき此事も已ぬ其後歩兵と諸國軍兵の最  
要なる隊とあり

佛士バヤルド紀元千五百二の卒してのち佛士シ

ハルリーの士ふし日身曼よあつてをマキレミリア

ン第一帝と最後の俠士と名づく英國よとをシハル

リーののことエリサベットのときまで滅びざりしとぞ

今り貴人英語ノンと中古の俠士英語ノンと

同じ故よ今の貴人も古の俠士の如く神と信じ女と

敬し敵と恐まばるる三徳ありとぞ其徳あけ

せど貴人の名位と保つとソレども詐ツク譎ツクよして決し

て真の貴人よ、然るに然きども善き事極きを必を惡

まよ流るる世の習ヒとて貴人の三徳より數多の凶

事生じ多り譬へど勇を好む徳より徒らよ名譽を争

ひ各人相刺して快とし多り凶事起り相刺して快と

ふ女を敬する徳より淫亂遊蕩の惡風生じ多り合此

嗚呼あゝ 豈嘆ぜざるをんや

西洋易知録卷之四下終

西洋易知録卷之四附記

第四世聞人の姓氏

アベラルド 紀元千零七十九年グレタリン不列太尼佛郡名ヨ生  
 論理神學の師として其學を講ずるとまを之を  
 と聴聞する者五千人に至りたり○レントバルナルト  
 此人を識りて教法を背きし人ありとワヘリ○其著  
 を所神學の書多し○千百四十二年シヤロンスに於  
 て死を

トーマスアクィナス 千二百二十七年アクィナルナに在  
 りヨ生り○貴族あり○神學を長む○著を所「シオンマ

テオロジ書りり○ドンススコテスと異あむ説

と懐まろく大名彼と覚ひりり○千二百七十四年卒を

シマブー 千二百四十年フロレンスに生る○貴族

あり○當時画學の祖あり○千三百年に死を

ジョン・ドンススコテス 千二百六十五年頃生る○

高名の神學者あり○千三百八年死を

ダント 千二百六十五年フロレンスに生る○アル

チリ家の一族より政權を争ひし人あり○伊太利

の詩の大家あり○其著を所の詩「ヂヒナコメ」名曲

とりのを未來の世の夢を説きし高名の詩あり○千

三百二十一年ラベリナにありて死を

ペトラルク 千三百零四年アレツに生る○伊太利

詩の大家あり○アウソニに在り○深くラウラとい

へる女を愛しむれどソニモ「とりの」詩篇を作し

て其才美を稱しり○其外「臘丁語」の詩文と著せ

り○千三百七十四年に死を

ボツカレオ 千三百十三年フロレンスに生る○其著

「ラテセー」名詩とりの詩篇を始め任侠の事

と作し詩あり「シャウセル」其詩は基まろく義士詩談と

作せり○然し此人を詩よりも特に文章は巧とあり

し○其著を所「テカメロシ」名書とりの小説より一百條

の物語を集めたりいと面白き書あり○千三百八十

四年に死す

ウィックリッヘ 英國ヨルクシャーの人○オクソン  
のハリオル學校の學校の校長にありて神學の教授せり○英  
國はありて始りて耶蘇教を改革しる人あり○英  
文は巧とありし○英語を以て經典と翻譯せり○千  
三百八十四年に死す

フロイサルト 千三百三十七年ハレンシアンに生

り○英王の妃ヒリッパの書記官とありて○歴史は明  
らよしと且つ詩は巧とありし○其著せる書の中は  
千三百二十六年より千四百年まで西歐羅巴の戦争  
武功を述べたる物語あり

シヤセル 千三百二十八年倫敦に生る○英詩の大

家あり○イドワルド第三リチャルド第二に仕へあり  
○著せる義士詩談あり○千四百年に死す



第四世の紀事の表

紀事	紀元
第一の十字戦始まる	千零九十六年
歐羅巴の兵耶路撒冷と取り	千零九十九年
ノルマンジのギスカルドナールスの王とある	千百零二年
「テンプルル」會社起る	千百十八年
アマルヒよ於て如智尼安帝の法律書と見出せり	千百三十七年
第二の十字戦始まる	千百四十七年

英國「フランタジ」朝興る	千百五十四年
英王ヘンリー第二愛爾蘭と攻む	千百七十二年
サラヂン耶路撒冷と抜く	千百八十七年
第三の十字戦始まる	千百八十九年
第四の十字戦始まる	千百九十五年
第五の十字戦始まる	千百九十八年
歐羅巴の人剛士但丁府よ於て勇功とせり	千二百零三年
ランゲドックの良民と征伐を	千二百零八年
少年の十字戦	千二百十二年
英王ジョン「マグナチャルタ」の法と許を	千二百十五年

第六の十字戦始まる	千二百二十七年
ゼンギス王亞刺伯國を勝つ	全
グレゴリー第九背教の徒を探て之を責むの法を立つ	千二百三十三年
第七の十字戦始まる	千二百四十八年
亞刺伯國アバシード朝滅ぶ	千二百五十八年
希臘人再び剛士但丁府を復す	千二百六十一年
第八の十字戦始まる○此歳佛王路易第九殂す	千二百七十年
ハプスボルグのロドルフ日耳曼帝とある	千二百七十三年

テウトニツの會社の士普魯士と取す	千二百八十一年
英王イドリド第一華列斯と取す	千二百八十二年
土身其人アクトと取す○此歳十字戦止む	千二百九十一年
コールトレイの合戦	千三百零二年
教公都とアウイノンと役を	千三百零五年
瑞士獨立の亂起す	千三百零七年
バンノックホルンの合戦	千三百十四年
モルガルテンの合戦	千三百十五年
クレシイの合戦	千三百四十六年
リエンヂ羅馬の議長とある	千三百四十七年

第六の十字戦始まる	千二百二十七年
ゼンギス王亞刺伯國を勝つ	全
グレゴリー第九背教の徒と探て之を責むの法と立つ	千二百三十三年
第七の十字戦始まる	千二百四十八年
亞刺伯國「アバシード」朝滅ぶ	千二百五十八年
希臘人再び剛士但丁府を復す	千二百六十一年
第八の十字戦始まる○此歳佛王路易第九殞す	千二百七十年
ハプスボルグのロドルフ日耳曼帝とあり	千二百七十三年

テウトニク會社の士普魯士と取す	千二百八十一年
英王イドロルド第一華列斯と取す	千二百八十二年
土耳其人アタレーと取す○此歳十字戦止む	千二百九十一年
コールトレイ合戦	千三百零二年
教公都とアタノニム徒と	千三百零五年
瑞士獨立の亂起す	千三百零七年
バンノックホルンの合戦	千三百十四年
モルガルテンの合戦	千三百十五年
クレシールの合戦	千三百四十六年
リエンヂ羅馬の議長とあり	千三百四十七年

日耳曼帝查理第四國法と作て黄金の法と名づく

千三百五十六年

瑞士八州合を

千三百五十二年

日耳曼ハンセーチック諸府の諸府同盟セヨロリンを會して盟と尋ぬ

千三百六十四年

教公又羅馬の都を

千三百七十七年

センバツクの合戦

千三百八十六年

西洋易知錄卷之四附記終

